

Allied Health Sciences

北里大学 医療衛生学部

2014年7月1日発行

— 第 15 号 —



〒252-0373 神奈川県相模原市南区北里1丁目15番1号

TEL 042(778)8111(代) FAX 042(778)9628

<http://www.ahs.kitasato-u.ac.jp>

発行責任者：学部長 北里 英郎

北里大学に着任して、この7月でちょうど24年になります。まず、これまで私を育てて下さった皆様、さらに、その恩に報いる機会を北里研究所創立100周年の節目の年に与えて下さった学校法人北里研究所と医療衛生学部の教職員の皆様に感謝いたします。これから皆様のご期待に応えるべく努力していきたいと思っています。

学長選考の所信表明の際にアピールできた大きな実績に、私が医学部から医療衛生学部に移籍した平成15年度の第7回教員教育研修会で発表した「問題解決型チーム医療教育の提案」があります。移籍して感じた事のひとつが、



学長に選任されて

小林 弘 祐

医療工学科医療工学専攻 教授

プロフィール：今年還暦。昭和53年慶應義塾大学医学部卒、昭和60年から3年間当時西ドイツのルール大学生理学研究所で助手。平成2年北里大学医学部講師、平成15年医療衛生学部教授、平成24年大学院医療系研究科科長。呼吸器内科で診療、日本呼吸器学会代議員、内科系学会社会保険連合副代表。4人家族+愛犬テラ。趣味オペラ鑑賞。

レゼンを締めくくる事ができました。今後全学部の教職員と学生が、お互いに刺激し合い、さらに高めあっていければと思います。他にも、勤続20年のお祝いをいただいた平成23年に、前学部長の石原和彦先生に行かせていただいた「北里のルーツを辿る旅」で理解を深めた学祖 北里柴三郎先生の事、野城真理先生の退任記念講演会での18才人口減少問題の資料など、医療衛生学部で経験した数多くのことが役に立った事を感謝いたします。

さて、学長はこれまで雲の上の人と思っていましたので、その立場が、まだ、しつくり来ません。ある人にこう言われました。「これまで学長は雲の上の人とっていいました。前学長の時に、少し雲が晴れた思いがしました。この度は、地の上の人で、とても身近に感じます」と。私はこれからも、雲の上の人にならないように、医療衛生学部の教員という立場も保ちながら、現場感覚をもった学長を目指したいと思っています。ばったり出会ったときでも結構ですので、気がついた問題点や改善提案を気軽に寄せただければ嬉しいです。



臨床工学研究室にて

陰げで昨年の伝移管問題に遭遇し、自分の所信に因って伝研を断固として辞任した。私が予ねて福沢先生から受けておりました所の精神的教育、即ち独立不羈^{どくりつふき}ということを実行し得たものと自ら誇っている次第でございます」と述べられています。私はこの「独立不羈^{どくりつふき}」の精神が北里大学のバックボーンだと考えています。

また、学祖は「師の後を追わず、師の求むる道を歩むべし」とも言われています。常に未来を見て、歩む姿勢が大切だと思います。独立不羈^{どくりつふき}の精神で、他に代えられない一流の大学を目指して行きたいと思っておりますので、今後ともよろしくご指導ご鞭撻の程、お願いいたします。Pioneer the Next



作業療法学

Occupational Therapy Course

■作業療法学専攻とは

作業療法は、身体や精神に障害を有した患者様に対して、生活動作の改善を図る治療や支援です。作業療法学専攻では、全ての学生が国家試験に合格することはもちろん、将来の作業療法を創造できる人材を育成することを目指して学部から大学院までの一貫した教育を行います。作業療法学専攻の最近の話題をFacebook (<https://www.facebook.com/aasciencelab>) や Twitter (<https://twitter.com/AAScienceLab>) に掲載していますので、ぜひご覧ください。

活躍する卒業生

「大学院修士課程を卒業して」

増玉医科大学総合医療センター 平井 良太



私は7年目の作業療法士です。現在大学病院に勤務しており、主に、急性期の中核疾患を対象としています。外来や訪問リハビリテーションも行っており、小児から高齢者まで幅広い領域で作業療法を行っております。

多くの症例を担当し、研究もしてみたいという気持ちが強かったため、大学4年生の時に大学病院への入職を希望しました。入職後は、臨床業務をこなしつつ、2年目から本格的に高次脳機能障害に関する研究活動を始めました。研究活動を継続する中で、次第に母校の大学院で研究の質を高めたいということを考えるようになりました。その後職場の上司に相談した結果、5年目からは働きながら北里大学大学院医療系研究科修士課程に入学し、研究活動をさせて頂けることになりました。入学後は、福田倫也教授の元で「脳梗塞患者の日常生活活動に影響を与える因子の検討」というテーマで研究活動を行ってきました。修士課程でまとめた内容を、作業療法士になった時からの目標でもあった国際学会で発表させて頂く機会も

得ることが出来ました。今後も大学院で得たことを活かし、質の高い研究活動を続け、国内外に発信していく努力をしていきたいと考えております。

また、修士課程在学中の2年間は研究だけではなく、福田先生をはじめ、多くの先生方とお話をする機会を頂けたこともあり、リハビリテーションに関する知識が増え、臨床の考え方も変わり、大きく成長できた時間となりました。何よりも、「作業療法の面白さ」を大学院卒業後に強く感じるようになります。今後は実習生や後輩にしっかりと伝えていきたいと考えております。



上肢機能訓練を兼ねた整容動作訓練場面

在校生紹介

作業療法学専攻での日々

作業療法学専攻3年 天野 康平



シヨンが取れたのではと少し後悔も感じました。

実習を終えてからボランティアへ積極的に参加し、多くの症例を経験し、作業療法学専攻の先生方、先輩方、クラスメイトと意見交換を行い、コミュニケーションは会話だけではなく、非言語的コミュニケーションも大事であることを知ることができました。それによって、次に行われた実習では力が入りすぎず自分らしく臨むことができました。

北里大学に入学して2年半が経ちました。3年次では専門科目を中心に授業を受け、作業療法士への道に少しずつ近づいていることを感じながら充実した日々を過ごしています。

作業療法学専攻では2年次の8月と2月に5日間の臨床実習が行われます。自分は実習現場で働く作業療法士を含めた職員の方々と患者様の姿を見て、作業療法の奥深さや面白さを感じました。作業療法士への憧れは一層強くなり、この先の勉強に向けての意欲が湧きました。しかしその中でもっと会話などを通じてコミュニケーション



授業でのディスカッションの様子

このように課題や問題に対しても北里大学では先生、先輩、後輩、クラスメイトの距離が近くアットホームな環境であるので、授業または授業外でも情報の共有や意見交換が行えます。こういった環境により自分ひとりの考え方だけでなく、様々な人の考えも参考にすることでより広い視野で物事を考えることができるようになりました。

今、自分にある環境、時間を大切に、現場で活躍できる作業療法士になるためにこれからの実習や勉強に励み、残りの1年半の大学生生活を充実させたいと思います。

■診療放射線技術科学専攻とは

放射線技術科学専攻は、卒業後、先端的な診断機器であるX線CT、MRI、PETや、量子線等を用いた放射線治療装置を実際に操作する職業に就く。そのため、画像を得る原理から、実際の臨床診断のための画像処理、治療系計画と広い分野の習得が求められる。優秀な学生は、大学院に進み先端的な知識と技能を身につけ、企業にも就職し放射線科学の発展に貢献している。

診療放射線技術科学

RT

Radiological Technology Course

研究紹介

大学院時代に学んだ高エネルギー物理学の基礎を放射線医療に役立てる

診療放射線技術科学専攻放射線科学 講師 村石 浩



私は茨城大学理学部で博士号（理学）を取得後、茨城県立医療大学を経て平成15年4月にRT専攻に着任しました。現在、放射線計測学（診療放射線技術科学専攻）や放射線科学（医療検査学科）などの基礎専門教育に従事する一方、放射線物理学を背景とした主に2つの研究テーマを主導的に展開しています。①「重粒子線がん治療計画精度向上を目的とした重粒子線CTの検討」～本手法は40年に渡り「夢の手法」とされてきましたが、最近、我々はその臨床応用の壁となる「10分での高分解能撮影」に世界で初めて成功しました（アメリカ応用物理学会誌に報告）。現在、ハイドルベルク大やハーバード大が我々の手法を引用し、臨床応用へ向けた開発研究を開始しています。②「コンプトンカメラ法によるγ線イメージング装置開発（ガンマアイ）」～コンプトンカメラ法は次世代のγ線イメージング手法として世界的に注目を集めている最先端技術です。私は、大学院時代に超高エネルギー宇宙ガンマ線計測に関する国際共同研究に参加し、南

オーストラリア州の砂漠で長期に渡って大規模実験に従事していました。2年前に当時の仲間と新グループを結成し、福島原発事故で飛散した放射性セシウムを可視化するための検出器開発を新たに開始しました。昨年度開発に成功した世界最高感度の福島フィールド用検出器は、（株）富士電機・シンセーにより製品化準備が進められています（春の日本医学物理学会では大会長賞を受賞）。また、病院用プロトタイプ装置開発も遂行中であり、北里大学病院核医学施設でのRI汚染イメージング（写真）や次世代核医学診断装置開発を行う予定です。今後も本学にて教育・研究活動を邁進していく所存です。



北里大で開発中のガンマ線イメージング装置（北里大学病院核医学施設にて）

活躍する卒業生

診療放射線技師としての第一歩

北里大学病院放射線部 工藤 寛子



私は平成26年3月に北里大学医療衛生学部診療放射線技術科学専攻を卒業した17期生です。この春から、北里大学病院にて診療放射線技師として第一歩を踏み出しました。

入職して間もなく、北里大学新病院の開院が目前です。私が配属された一般撮影部門では、ほぼすべての装置が新規導入されることが決まっており、そのため、新病院開院までの間、既存の装置だけでなく新規導入される装置や患者様呼び込みシステムの練習を行ってきました。4月に入職し右も左もわからない中で、次々と新しい知識を得ることや社会人としての生活に慣れることにとても苦労しました。



小児撮影室の仲間と

このような新たな環境で、先輩方と共に新病院を創りあげていく一員として参加できたことはとても貴重な体験であったと思っています。現在、新病院が開院し約1か月が経ちましたが、ここからが本当のスタートだと思っています。まだまだ撮影に関しては失敗も多くあり、その度に先輩方は優しく指導してください。私個人としても、新病院とともに成長していきたいよう頑張ります。

細胞検査士

細胞検査士コース修了式

医療検査学科臨床細胞学 准教授 服部 学

去る2月10日に平成25年度細胞検査士コース修了式が行われました。細胞検査士とは、基本的には臨床検査技師国家資格を取得後、試験に合格すると得られる学会認定資格です。本学は、日本で数少ない学会認定の細胞検査士教育施設であり、毎年コース修了生が4年次(臨床検査技師国家試験受験前)に受験しております。毎年の平均合格率が約30%とされる難関試験ではありますが、本学におきましては、平成9年度の1期生から昨年度の17期生まで226名がコースを修了し、214名が資格を取得しております。

修了式は、修了生である17期生12名に加え、本年度履修生である18期生15名が参加し、修了証書授与および17期生から18期生への席および顕微鏡の引継が行われました。細胞検査士は、医療検査の中で最も長時間、顕微鏡に向き合うとされる職種です。本コースでもほ



細胞検査士修了証を受け取り、誇らしげな17期生



17期生から引き継ぎを終えて。17期生、18期生集合写真



顕微鏡等を引き継ぐ。引き継ぎは和気あいあいと行われた

ほ毎日、長時間顕微鏡と共に過ごすため、愛着のある顕微鏡を引き継ぐ姿は感慨深いものでした。今後とも優秀な細胞検査士を育成できますよう、ご支援・ご協力のほど宜しくお願い申し上げます。

研究交流会

医療衛生学部教員研究交流会

研究委員会委員長 高平 尚伸



ベストプレゼン賞を受章した言語聴覚療法学専攻

第5回医療衛生学部教員研究交流会は、平成18年2月の第1回から「研究活動の活性化を図るための研究会」として隔年開催されていきます。今回は、平成26年3月17日(月)15:30~18:30に開催され、参加者は100名でした。

テーマは前回同様に研究委員会の重点計画の1つである「学内共同研究の推進」としました。前半は各研究グループにより、研究内容に加えて共同研究のために提供できる資源(知識、技術、機器、データ等)および必要とする資源、すなわちギブアンドテイクについてショートプレゼン発表会を行い、後半はポスター展示会場での討論と懇親会を行いました。

発表会の冒頭では、健康科学科公衆衛生学の山内博教授から「センターオブイノベーション(COI)プロジェクトから学ぶ共同研究への取り組みについて」の模範のプレゼンが行われました。そ

ポスター展示会場では軽食をとりながら討論が行われました。外国ではチーズアンドワインで行われるようですが、それに負けないくらいの雰囲気でした。すでにいくつかの共同研究が進められています。この会から世界に発信できる共同研究が新たに生まれ育っていくことができれば、研究委員長としてこれほど嬉しいことはありません。皆様のさらなるご活躍を心から祈念しております。

の後、全21件の発表が行われ、時間厳守をお願いしたにも関わらず、結果的には時間オーバーになるほどの熱い発表会でした。ベストプレゼン賞はリハビリテーション学科言語聴覚療法学専攻、ベストポスター賞は基礎医学部門病理生理学、特別賞は医療検査学科病理学に決定し、懇談会で表彰が行われました。



ポスター発表会場。盛んな意見交換が行われた

若手研究者

米国国立衛生研究所 (NIH)
留学報告基礎医学部門
病態生化学
助教 川上文貴

研究室がある John Edward Porter Neuroscience Research Center, Bldg.35

現在、私は米国メリーランド州ベセスダにある米国国立衛生研究所 (NIH) に所属する国立老化研究所 (NIA, National Institute on Aging) に滞在しています。ベセスダは、首都ワシントンDCの郊外に位置しており、DCからは地下鉄で20分程度です。ここは治安もよく、適度に田舎で都会にも近く、とても住みやすい場所です。気候としては、年により変動はあるようですが、たまたま今年の冬は大寒波に見舞われ、外気が氷点下18℃になる日もありました (こちらは華氏表示なので少し混乱します)。

私が所属しているのは、Laboratory of Neurogenetics (LNG) の Cell Biology and Gene

Expression Section です。LNG では、主にアルツハイマー病やパーキンソン病、筋萎縮性側索硬化症などの中枢神経変性疾患に関する研究が行われています。LNG は大きく4つの部門から構成され、疾患原因遺伝子の探索から遺伝子改変動物および細胞レベルまでの解析が一つの研究室の中で完結できる体制になっています。研究室全体には各国から集まった約40人の研究者が在籍しており (日本人は私だけ)、私の所属する部門には8か国 (アメリカ、イギリス、ロシア、ギリシャ、サウジアラビア、ナイジェリア、マレーシア、日本) 12人がいます。このような国際色豊かな環境を経験できるのもNIHの大きな特徴かもしれません。

ここに来るまで、ボスの Dr. Mark Cookson とは一度も会ったことがありませんでしたし、誰かの紹介というわけでもなかったのですが、初めは不安でしたが、ボスをはじめ良いメンバーに恵まれ、自分が希望する研究をやらせてもらえています。

終わりになりますが、留守中、諸般の学内業務を肩代わりして頂いている市川尊文先生はじめ病態生化学研究室のみなさん、医療衛生学部の皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。

研究最前線

活性汚泥を用いたバイオプラスチック
(ポリヒドロキシアルカン酸) 生産健康科学科
環境衛生学
講師 井上大介

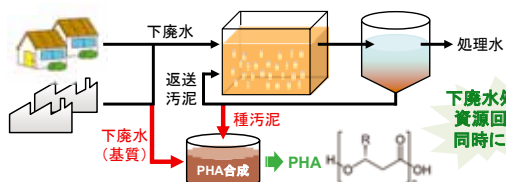
私達が日々排出している下廃水は、下水処理場において活性汚泥 (多種多様な微生物の集合体) を用いて処理されている。下水処理場は衛生的な生活環境の維持に不可欠なインフラであるが、実は、大量のエネルギーを消費しながら、別の見方をすると資源ともみなせる下廃水中の有機物等を除去している。このため、資源枯渇やエネルギー危機が叫ばれる中、下水処理場では下廃水を利用するだけでなく、絶えず受け入れている大量の下廃水から資源・エネルギーを回収し循環利用することが求められている。

下水処理場で回収できる資源・エネルギーには、水、メタン (天然ガスの主成分) など様々あるが、私はポリヒドロキシアルカン酸 (PHA) に注目した。PHA は、微生物が炭素とエネルギーの一時貯蔵物質として合成し、細胞内に蓄積する脂肪族ポリエステルであり、熱可塑性、生体適合性、生分解性をもつバイオプラスチックでもある。プラスチックは現代社会に不可欠な資源であるが、枯渇資源である石油から化学合成されており、持続的な供給や地球温暖化抑制の観点から、バイオプラスチックへの転換が望まれている。そこで、活性汚泥を用いて下廃水中の有機

物を除去するとともにPHAとして回収することを目指している。

現在は、多種多様な微生物で構成される活性汚泥から優れたPHA蓄積能を有するものだけを選択的に集積する方法の確立と、集積過程の微生物挙動の解明に取り組んでいる。これまでの検討において、比較的短期間の集積培養によって元の汚泥に比べて3倍程度も効率良くPHAを蓄積し、その蓄積量が細胞重量の約60%にも及ぶ集積系を構築することに成功している。しかも、温度やpHなどの制御を行わなくてもPHA高蓄積菌が集積できることも分かっていた。

まだ基礎研究の段階であるが、将来的には活性汚泥を用いて下廃水からPHAを高生産できる技術を確認し、微力ながら下水処理の進化、ひいては持続可能な社会の実現に貢献していきたい。



バイオプラスチック (PHA) 回収型下廃水処理システムのイメージ

気になる最新医療⑦

チューブシャント手術

視覚機能療法学専攻
視覚生理学
教授 庄 司 信 行

教授 庄 司 信 行

みなさんは、緑内障という病気を知っていますか？私が専門としている緑内障は視神経の病気で、進行性に視野が障害され、見えな場所が広がる病気です。一度障害された視神経や視野は元に戻りません。患者さんごとに進行の速度は異なるため、必ずしも失明に至るとは限りませんが、視野障害の場所によっては日常生活がかなり不自由になります。緑内障の治療は、現時点では、眼圧(眼の内圧)を下げるのが唯一の治療法です。眼圧は眼の中を流れる水(房水)の量によって決まります。この房水の量を減らすために最初は点眼薬を使いますが、不十分な場合は手術が行われます。術式には、房水の出口を拡げる方法と、出口

を新しく作る方法があり、後者の方が眼圧は良く下がります。最近、この新たに作った房水の出口に器具を埋め込む方法が認可されました。この器具を埋め込む手術を「チューブシャント手術」と言います。今のところ、我が国ではプレートのないステンレス製の「エクスプレス」と、プレートのあるシリコン製の「バルベルト」の2種類が使用可能です。エクスプレスは、長さは2.6mm、内腔は50μmのとても小さな針のような形をしています。3テスラまでのMRIは問題ないと言われていますが、磁場強度によっては注意が必要です。もう一つのバルベルトは、眼内

に挿入したチューブからその先にあるプレートに流れて眼の奥に房水を拡散させる方法ですが、チューブの根元からプレートにかけての部分は角膜から10mm以上眼の奥の方に縫い付ける必要があります。かなり大きな切開が必要です。また、プレートが大き過ぎて(幅20〜30mm、奥行き15mm)、眼球を動かす筋肉に引っかかって、眼球運動障害や複視を生じることがあると言われています。新しい器具は、海外からも良い成績が数多く報告されていますが、長期的な成績が不明ですので、細心の注意を払いながら、適応を選んで使っていきたいと思っています。

大学2年生で海外旅行デビューをして以来、スペインのシリ、ポルトガルの白タタ、トルコの変態さん、ポーランドでのほろ酔い迷子など、旅行中に様々なスリルを味わい、すり抜けてきました。中欧を鉄道で廻ったときは、ガイドブックを早々に失くした上に宿泊先の事前調査が足りず、ドイツ・ミュンヘンで降車駅を間違え(地図上の最寄駅が真の

医療衛生学部事務室
教務課 学生係

建部 祥子

リレーコラム

最寄駅ではなかった！、雪の中郊外の工場街をひたすら歩くという事態に。途方に暮れていたところを通りがかりのおじさんが車に乗せて宿泊先まで送り届けてくれ、事なきを得ました。どれも一歩間違えたらとても危険な目に遭うところでしたが、良いも悪いも現地の人との交流が生まれるきっかけとなりました。観光地巡りも魅力的ですが、たとえ言葉が通じなくても旅先での人との交流は刺激的で、新しい世界を発見させてくれます。これこそが醍醐味であり、私を旅行に駆り立てるのかもしれない。

グランドミステリー・パンデミックフルー

その8 亡霊のフットプリント

森羅 星辰

引き続き安曇は、2009年の豚インフルエンザウイルスの遺伝子解析を行なった。このパンデミックを起こしている豚ウイルスは3段階の過程を経て誕生していた。まずH3N2亜型の人、北米の豚、鳥のウイルスが交雑し、人のウイルスH3N2亜型をもつ北米の豚ウイルスが1998年に誕生。その後、H1N1亜型の北米の豚ウイルスと交雑し、H1N2

亜型北米の豚のウイルスが誕生。そしてH1N1亜型のユーラシア大陸の豚ウイルスと交雑し、H1N1亜型豚インフルエンザウイルスが誕生していた。「北米の豚ウイルスとユーラシア大陸の豚ウイルスと交雑が起きたウイルスがなぜメキシコで出現したのか？鳥ウイルスが交雑したのは10年以上前だ。この豚ウイルス誕生には鳥は介在してはいない。そうすると渡

り鳥がユーラシアの豚ウイルスを運んできたとは考えられない。海を隔てているから大陸間でウイルスが自然に交雑するとも考えられない。最初に患者が見つかった場所、SF社内では一体何が行なわれていたのか……。」と安曇はある可能性を導き出した。(つづく)

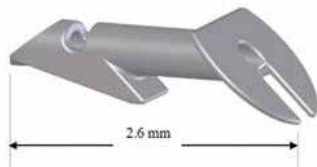
豚インフルエンザウイルス
(CDC提供)

図1 エクスプレス

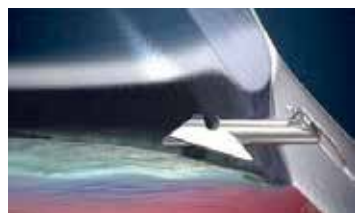


図1a エクスプレス挿入図

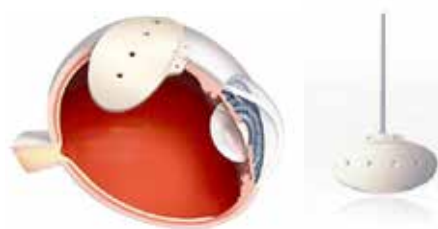


図2a バルベルト挿入図 図2 バルベルト

新任教授

北里大学に着任して



リハビリテーション
学科作業療法学専攻
成人作業療法学
教授

鈴木 誠

昭和47年に高知県で生まれました。本学部の発展に少しでも貢献できるよう、教育と研究に努力していきたいと存じます。

平成25年11月1日付で、リハビリテーション学科作業療法学専攻の教授に就任しました、鈴木誠です。

私は、平成11年に聖マリアンナ医科大学附属病院にて作業療法士として勤務を始めました。その後、名古屋大学医学系研究科より博士（リハビリテーション療法学）の学位を頂き、平成20年から新潟医療福祉大学医療技術学部にて仕事をさせて頂きました。

私の専門は、行動学習に関する研究です。オペラント学習理論を軸にした行動学習の研究を通じて、「どのような対象者に、どのような行動練習を実施すると、どのような結果が予測されるのか、なぜそうなるのか？」という問いに答えることが私の研究の目標です。現在は、福田倫也教授をはじめ、作業療法学専

攻・理学療法学専攻の先生方、臨床施設の先生方と力を合わせ、臨床研究と実験研究を連係して進めています。一連の研究活動を通じて、これまで経験主義的に構築されてきた作業療法の意味や合理性を科学的に検証していきたいと考えております。また、国内外の学術誌へ研究成果を投稿することに加え、書籍の執筆やインターネットを利用した情報発信など（<https://www.facebook.com/aasciencelab>）、新しい科学的知見を本学部から幅広く発信していければと考えております。

若輩者ですが、今後ともご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

教授就任のご挨拶



リハビリテーション
学科言語聴覚療法専攻
言語聴覚学
教授

石坂 郁代

小・中学校を町田で過ごし、上智大学仏語・東北大学教育学研究科修了。言語聴覚士。紅茶、犬猫、バラが好き。

平成26年4月1日付で、リハビリテーション学科言語聴覚療法学専攻の教授を拝命いたしました。これまでの4年間諸先生方にご指導いただいたことを忘れずに、教育・研究・学内運営・社会貢献などにバランス良く努めて参りたいと存じます。

私は、まだ言語聴覚士（ST）の国家資格がなかった頃に、「言語と脳の関係を追究する神経心理学が研究でき、しかも人の役に立っている仕事がある」と知って、STの勉強を始めました。私淑している元神戸学院大学の山鳥重先生は、ニューロンの神経生理学的活動が主観的現象あるいは心理的経験に変換される現象のプロセスを、臨床神経心理学的立場から研究されています。私も、発達性dyslexia（先天的な読み書き障害）

の子どもたちの臨床の中から、人間の高度脳機能の仕組みを明らかにしていきたいと考えています。

STは、まだ一般には良く知られていない職種ですが、少子高齢化の時代にあって、非常に需要の高い（ありがたい）状況が続いています。本学の養成課程は全国的に見てもパイオニア的存在であり、将来を担う質の高い人材を育てていくことは、私たち教員の使命だと思っております。豊かな人間性と高度な専門性を備えた学生を輩出できるよう、今後もST専攻およびリハビリテーション学科・医療衛生学部の諸先生方と連携させていただきながら頑張っておりますので、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

よろしく願います



リハビリテーション
学科言語聴覚療法専攻
聴覚学
教授

佐野 肇

1960年生まれ。神奈川県出身。山梨の大学卒業後、北里大学に入る。現在の趣味はゴルフ、ドライブ。

この度、松平登志正先生の後任としてリハビリテーション学科言語聴覚療法学専攻の教授に就任いたしました。私は大学卒業後すぐに北里大学の耳鼻咽喉科に入りずっと臨床医として活動してきましたが、主な専門領域が難聴であった関係で医療衛生学部とも深い関係を持っておりました。それは私が研修を終えた時期に、当時耳鼻咽喉科の助教から医療衛生学部聴覚療法学の初代教授として移られた竹内義夫先生にご指導を受けていたことに始まります。竹内先生が研究室に揃えられた高価な音響測定装置に目を白黒させていたことが懐かしき思い出されます。竹内先生とその後任になられた松平先生は共に日本の聴覚学の世界における第一人者です。今回私がその研究室を引き継ぐこと

になったことは真に身が引き締まる思いです。

私が医師になった頃は難聴の治療といえば伝音難聴の手術がそのほとんどであり、聴覚障害者の大部分を占めている感音難聴に対する医療は極めて限られていました。その後人工内耳の開発と普及、補聴器の進歩、日本における言語聴覚士制度の確立、新生児聴覚スクリーニングの普及、多くの難聴原因遺伝子の同定、など聴覚障害の領域でも多くの進歩がありました。こうした状況の中で聴覚障害の医療におけるリハビリテーションが占める部分はどんどんと大きくなっています。聴覚障害を担当できる人材の育成とその進歩の一端を目指して努力していきたいと思えます。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

その研究室を引き継ぐこと

お願い申し上げます。

新任教員紹介



基礎医学部門薬理学

准教授 小島 史章

平成26年5月1日付で、薬理学研究室の准教授に就任いたしました。私は本学薬学部および同研究科を卒業した北里生まれの教員です。今後は、医療の現場で必要不可欠な薬についての高度な専門知識を持った人材の育成ならびに医学研究活動に精励いたす所存でございます。私の研究室から巣立った学生達が将来、様々な分野で多彩な貢献をしている姿を想像しながら日々全力で取り組んで参ります。今後とも一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。



医療工学科診療放射線技術科学専攻放射線安全管理学

准教授 佐々木 徹

4月1日付で標記のとおり就任いたしました。帝京大学薬学部、東京都健康長寿医療センター研究所(旧東京都老人総合研究所)で分子イメージング、基礎老化、放射線安全の研究、教育および基礎と医療の放射線安全管理に携わってまいりました。この度は、母校「北里大学」で教育、研究に携わる機会をいただきましたこと感慨に堪えません。これまでの経験で得たことの全てをもって後輩の教育にあたる所存です。皆様のご指導、ご支援を賜りますようお願いいたします。



基礎医学部門医療情報学

講師 守田 憲崇

平成26年4月に医療情報学の講師として着任いたしました。臨床工学専攻を卒業し、医療機関での勤務の後、北海道工業大学に在籍していました。研究活動として、心電図、加速度および角加速度などの生体信号を処理するソフトウェアを開発する研究を進めています。今後も、自分の得意とするプログラミングの技術と工学的手法を活用して、リハビリテーション、診断補助、医療統計学など、医療分野の発展に寄与して行きたいと思っています。よろしくお願い致します。



健康科学科精神保健学

講師 深瀬 裕子

本年4月に健康科学科精神保健学の講師として着任いたしました。東京女子大学、広島大学大学院を卒業・修了し、博士(心理学)を取得後、広大で助教をしておりました。高齢化が進む返りで育ったためか、高齢者が何を体験しているのかに関心があり、老化における心理メカニズムを研究しています。北里大学はハイスというイメージで、背伸びをしたくなりますが、誠実さを持って教育・研究・臨床活動に取り組みたいと考えております。どうぞよろしくお願い致します。



医療検査学科臨床化学

助教 井本 明美

平成26年4月より医療検査学科臨床化学研究室の助教として着任いたしました。北里大学医療衛生学部臨床検査学専攻(現医療検査学科)を卒業後、同大学院へ進学し、博士号(医学)を取得しました。学生時代には先生方や大学職員の方々にご指導いただき、多くのことを学ぶ機会に恵まれました。今後は、教員として卒業生として、学生の皆さんにも北里を卒業してよかったと思って頂けるような教育や研究指導を心掛けたいです。今後ともよろしくお願い致します。



医療検査学科微生物学

助教 中村 正樹

私が北里大学医学部に入学した当時、クラス担任が北里英郎講師(現医療衛生学部長、微生物学教授)という縁もあり、4月より医療検査学科微生物学の助教に着任いたしました。研修医時代には病院細菌検査室の二本柳伸主任(現係長)の下、細菌検査のイロハを学びました。また院内感染対策チーム(ICT)にも所属し現在も活動しております。細菌検査室やICTでの生きた知識を学生の皆さんにお伝えできればと思います。どうぞよろしくお願い致します。



リハビリテーション学科言語聴覚療法学専攻

助手 水戸 陽子

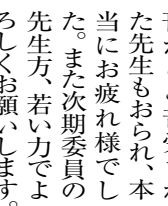
平成25年9月に言語聴覚療法学専攻の助手として着任いたしました。北里大学医療衛生学部を卒業し、言語聴覚士として医療施設での臨床経験をj経て、同大学院修了課程に進学いたしました。修了課程終了後、療育施設にて約6年間小児を対象に臨床に携わりました。今後は、これまでの経験を生かし、自ら考え疑問を追求する楽しさを伝えつつ、ひとりひとりの個性を大切に教育に取り組んでいきたいと思ひます。ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。



リハビリテーション学科作業療法学専攻

助教 田中 秀宜

2014年4月よりリハビリテーション学科作業療法学専攻の助教として着任いたしました。私の名前は「秀宜」と書いて「ひでき」と読みます。「宜」という字は「宣伝」の「宣」では無く「宜しく」の「宜」です。作業療法士として17年間、総合病院で勤務して参りましたが、この度、ご縁があって教職に就くこととなりました。多少の臨床(実践)での経験を、少しでも教育と研究に役立てることができれば良いと考えています。今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。



リハビリテーション学科視覚機能療法学

助教 平澤 一法



本学医療衛生学部(8期)を卒業後、慶應義塾大病院で臨床と研究を学び、その後は本学に戻り大学院に進学(修士・博士)、大学院修了後は東京大学の特任研究員として緑内障患者における検査結果のデータマイニングについて研究し、この度4月より視覚機能療法学専攻の助教として着任いたしました。学生に教えるだけでなく、学生の柔軟性に富んだ発想から学ぶことも意識し、精いっぱい頑張りたいと思います。これからも宜しくお願い申し上げます。

編集後記

新病院がついに完成しましたね。第1号のお子様誕生の御祝報告も来ています。私もすでに第1号となることをしました(泣・笑)。さて15号という節目のAHSが完成しました。新任の新しい仲間も増え学部もAHSも益々充実。お楽しみ下さい。今回で編集委員が交代となります。初刊からご苦労された先生もおられ、本当にお疲れ様でした。また次期委員の先生方、若い力でよろしく願ひします。

編集委員会

委員 石川 均

委員 大場 謙一

委員 原 和矢

委員 氏平 政伸

委員 河村 晃依

委員 野田 和子

委員 保田 明夫

委員 金子 清佳